

評論文コラム ～芸術論～

難しいと言われている「**芸術論**」について今日はお話します。

難しい理由の1つに、普段、皆さんが芸術論に触れる機会が非常に少ないということが挙げられます。なかなか日常生活では、目にする機会がありませんし（「新書」、読んでいますか?）、あっても高尚なジャンルだ、どうせつまらないと思って敬遠する生徒が多いと思います。また、いざ芸術論に触れようと思っても内容が難解で読むのを辞めてしまうなんて人が多いと思います。

そこで今回は、実際にセンター試験に出題された文章を、

「簡単に要約したもの」

を載せます。

短いので気軽に読めると思います。

読んでみると、新たな視点に気付き、

いつもの日常が一味違って見えたりします。

第二回考査に向けて、授業で「芸術論」を取り上げる予定なので、皆さんの予習にもなります！

是非、勉強の合間に息抜きとして読んでみてください。



吉田喜重『小津安二郎の反映画』 2005年センター試験(本試)

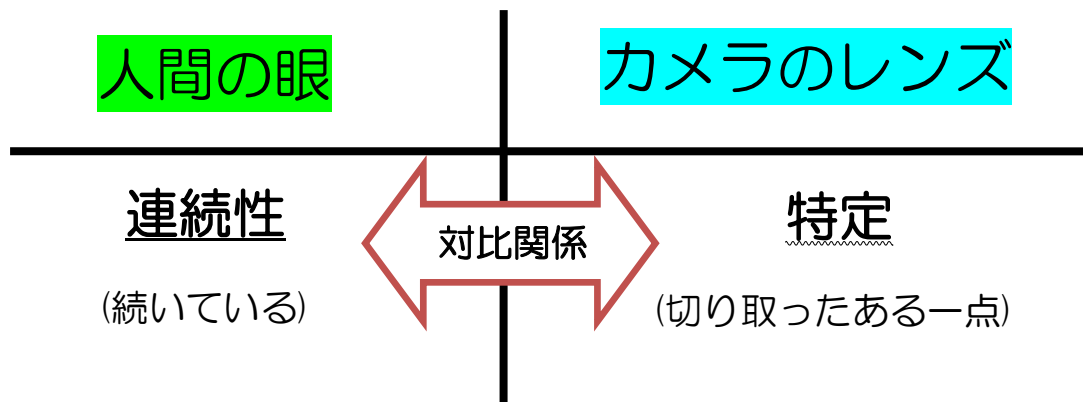
①「人間の眼」と「カメラのレンズ」は同等の機能を有すると思われがちだが、様々な事物や出来事を「連続的に捉える人間の眼」と、「特定された被写体を空間から切り取るカメラのレンズ」は相反するものである。

筆者は、まず「人間の眼」と「カメラのレンズ」を比べています。

2つは似ている…でも、人間の眼は連続的だ!カメラは特定のだ!と言っていますね。

つまり、人間の眼は「続いている(広がる)」!カメラは「ある一点」!ということです。対比関係は、こんな感じで真逆の特徴を挙げることが多いです。

対比表も作ったので見てみてください



「対比」の文章にゃー!
何と何が「対比」されているのかを
注意しながら読んでみて!
対比関係を下線で分けているので
ヒントにしてにゃー

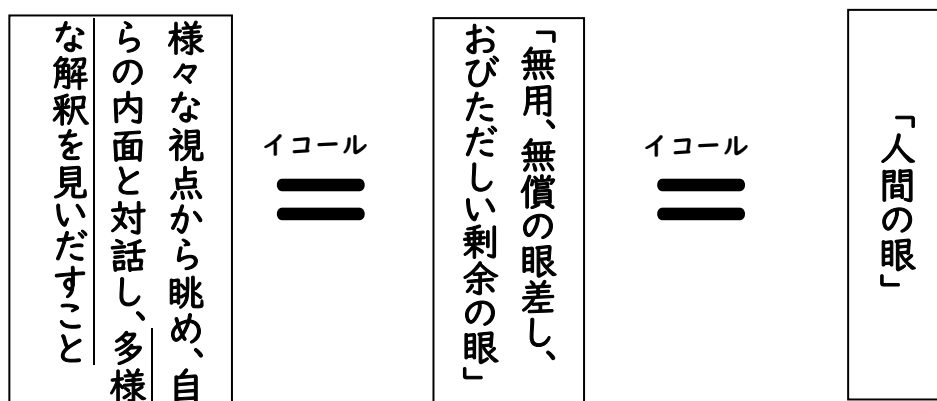


②また、「人間の眼」は様々な視点から自由に眺め、自らの内面でゆっくりと対話し、多様な解釈を見いだすことのできる「無用、無償の眼差し、おびただしい剰余の眼」である。しかし、「人間の眼」を否定するものとして「映画」がある。

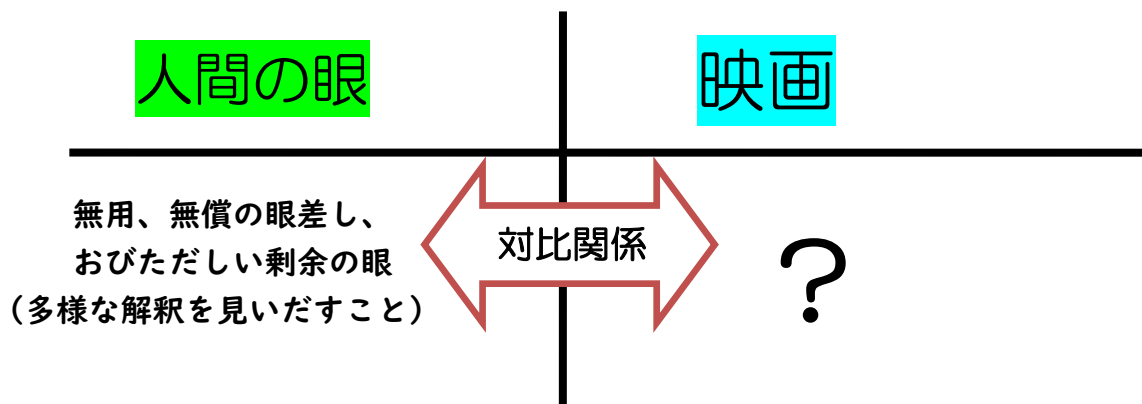
筆者は、「人間の眼」は「無用、無償のおびただしい剰余の眼」だ。しかし、「人間の眼」と相反するものとして「映画」があると言っています。

ここで「無用、無償の眼差し、おびただしい剰余の眼」って何だ??なんて深く考える必要はありません。「無用、無償のおびただしい剰余の眼」の直前をチェックしてみてください。「様々な視点から…できる」と書かれていますね。それが、「無用、無償のおびただしい剰余の眼」の内容です。

わかりやすく、図でまとめてみましょう。



次に「人間の眼」を否定する、つまり、「人間の眼」と対立するものが、「映画」であると言っています。上の図も踏まえて、まとめ直すと次のようになります

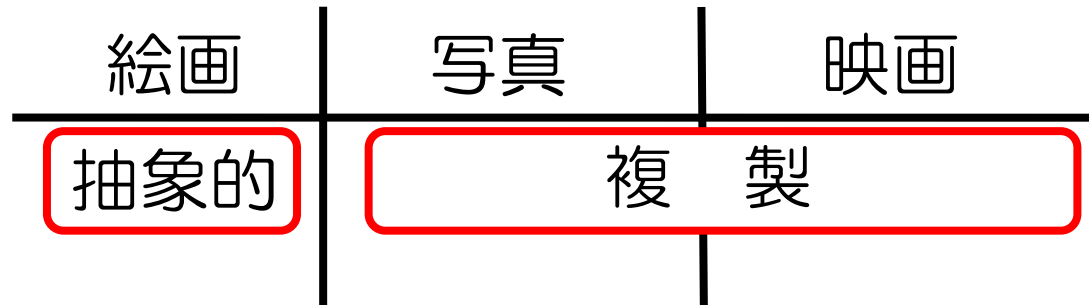


映画の下が「？」なのは、まだ今の時点で情報が書かれていないからです。ということは、次の段落から詳細が明らかになるということですね。

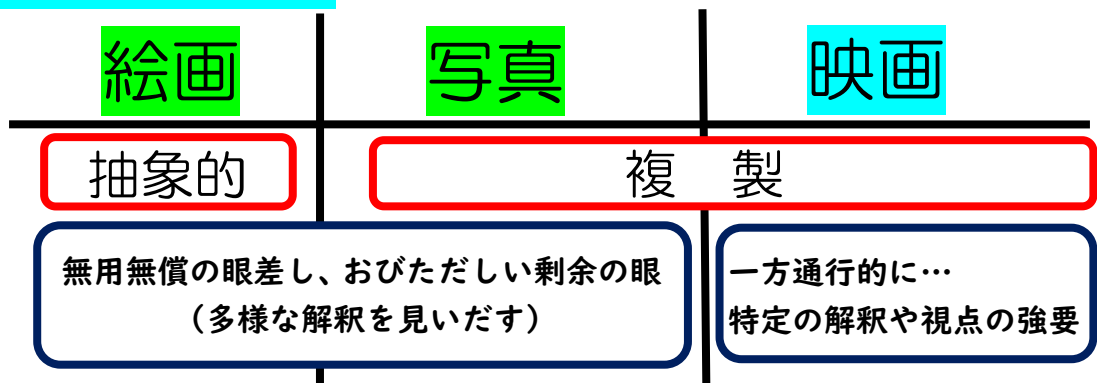
③写真と絵画と映画を比較すると、映画の暴虐ぶりがよくわかる。写真と映画は複製の表現である点で、抽象的な表現である絵画とは異なるように思われるが、見るという行為において考えると、写真も絵画も無用、無償の眼差しによってそれらを見ることができる。しかし、「映画」は一方通行的に流れる時間で人々を圧倒し、視線を抑圧することによって、特定の視点や意味を強要するものである。そのため「映画」は独占的で危うい表現であり、「見ることの死」であると言える。

この段落ではまず、映画の説明を行うために、写真や絵画と対比していますね。読んだだけではごちゃごちゃになってしまうので、また図にしながら見ていきましょう。

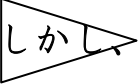
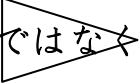
写真と映画は複製で同じ。対する絵画は抽象的。



「思われるが、」という逆接の表現に注目！大切なのは逆接の後ろの部分！すると、写真と絵画は、「無用、無償の…」で同じ。反対に、映画は「特定の意味や視点を強要する」これを上の図に追加すると



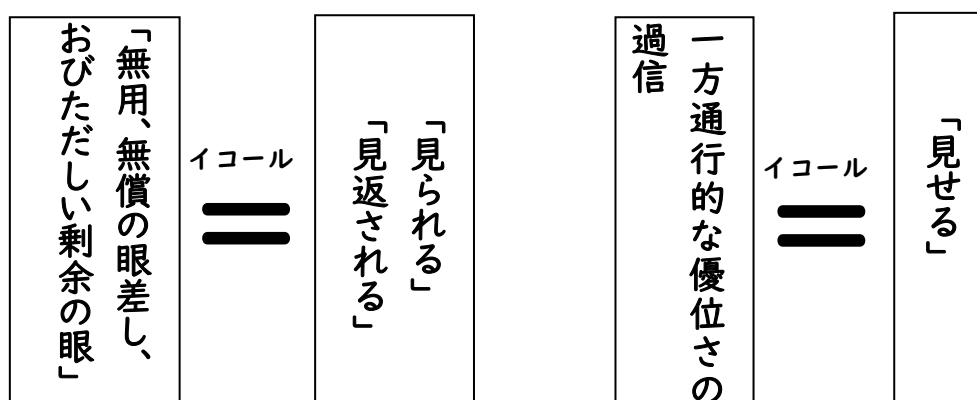
「無用、無償の眼差し、おびただしい剰余の眼」は「多様な解釈」とイコールであると、上での段落で確認しましたよね、覚えていませんか。ここまできたら、上の段落の図の中の、映画の「？」がわかりましたよね。そうです、「特定の解釈や視点の強要」が入ります。

④  しかし、その「映画」の持つ特性に反抗しながらも、「映画」を限りなく愛するという矛盾を貫いた存在として「小津安二郎」がいる。彼は映画の一方通行的な優位さを過信して観客に映像を「見せる」の  ではなく、あえて意味が曖昧な映像を用いることで、「無用、無償の眼差し、おびただしい剰余の眼」によって、「見られる」もしくは「見返される」映像を表現したのである。

前の段落でまとめたように、筆者にとって「映画」とは「**特定の解釈や視点を強要するもの**」でした。**しかし**、この段落で登場した「小津安二郎」の映画は違ったと言っています。何が違うのかというと、「**見せる**」ものではなく、「**見られる**」もしくは「**見返される**」ものであったと書かれています。

「見せる」や「見られる or 見返される」は新しい言葉ですね。ここでもその直前の文を読むことで、それぞれの内容が理解できます。

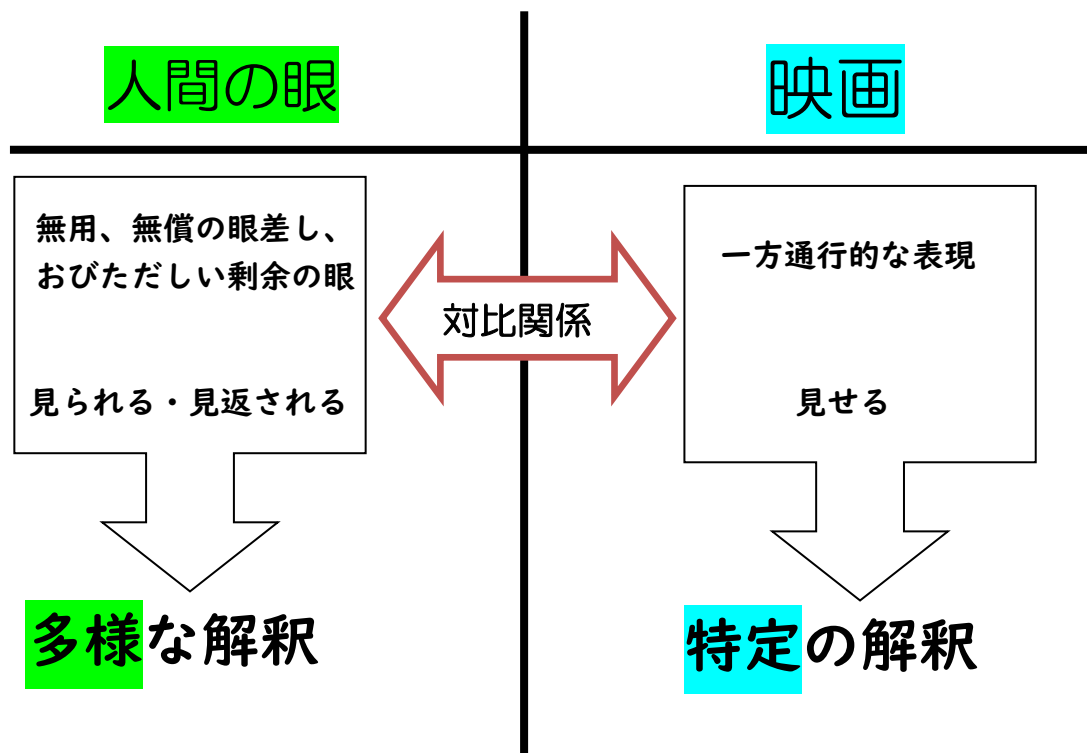
図にしてみましょう。



「無用、無償の…」は前に出てきましたね。なんだったかということ、「人間の眼」の特徴でした。また、「一方通行的な」という言葉も、前に出てきましたね。前の段落を振り返ってみてください。すると、「映画」の特徴として、「一方通行的に…特定の解釈や視点を強要」とあります。

それぞれの言葉が、これまでの筆者の言ってきたことの繰り返し、もしくは関連しているとわかりますね。

それでは、前の段落で作った対比図を整理しながら、追加していきましょう。すると、次のようになります。



ここまでまとめると、筆者の主張がはっきりと見えてきますね。

つまり、筆者は芸術とは「多様な解釈」ができるものであるが、「特定の解釈」を強要する「映画」はダメだ!(③段落の、独占的で危うい表現・「見ることの死」等のマイナス表現)と言っているのですね。

すると、①段落の内容も今ならわかると思いませんか。

①段落だけ、「人間の眼」と「カメラのレンズ」を比較していました。内容としては、「連続性」と「特定」の対比でした。ここでも「特定」という言葉が出てきましたね。①段落と②段落以降は別の話のように感じますが、よくよく読んでみると、筆者ははじめから「連続性」や「多様性」と「特定」を比較し続けていたのですね。

一言まとめ

芸術は「多様な解釈」ができるものである。
「特定の解釈」の強要は「見ることの死」だ。